

東京バッハ合唱団 月報

[第 617 号] 2013 年 11 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3-47604

Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No. 617

November 2013

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

第 109 回定期演奏会

《クリスマス・オラトリオ》(IV-VI) へのご案内

バッハ 4 大合唱作品[日本語]連続演奏 IV

大村 健二 (団員)

《クリスマス・オラトリオ》のIV・V・VI部は、昨年の定期演奏会で前半3部をお送りした一連の作品の後半にあたります。

前半のときに倣い、ここでも、初めてこのバッハ作品に接する方を念頭にご案内を試みてみます。前回との多少の重複は避けられませんが、なるべく視点を変えてみたいと思います。

● バッハ時代の教会とカンタータ

キリスト教会では、各日曜日と教会暦上の祝祭日に礼拝が行われますが、バッハ時代のドイツ・プロテスタントの主要な教会では、音楽をひかえる特別な期間をのぞく、すべての礼拝の中で、独唱・合唱と器楽とによる教会音楽が演奏されました。これらは、今日で

は「教会カンタータ」等と呼ばれていますが、年間の各礼拝のためにこの音楽を準備し、合唱団やオーケストラを動員して当日に上演することが、われわれの作曲家、ヨハン・ゼバスティアン・バッハ(1685-1750)のライプツィヒでの職務でした。

各礼拝では、年間の暦によって定められた聖書の箇所が朗読されましたが、バッハのそれぞれのカンタータの主題は、説教を担当する牧師とも打ち合わせながら、この聖書日課(ペリコーペ)に忠実に選択されました。原則として新約聖書から2か所、すなわち、パウロなどの使徒から各地の教会などに送られた「書簡」からの数節と、4つある「福音書」からの数節で、とくに後者は、具体的なテキストそのものとして、カンタータの中のレチタティーヴォ(語り)に引用されることもあります。この引用楽章をエヴァンゲリスタ(福音書記者または福音史家と訳す)と呼んでいます。

さて、当時のドイツの教会では、降誕祭(12月25日)から顕現祭(1月6日、後述)までの13日間がクリスマス期間と定められて、盛大に祝われています。この間の祝日を一覧し、《クリスマス・オラトリオ》を構成する6曲のカンタータとの対応を表わしてみよう。

| 固定祝日 | 祝日名 | 《クリスマス・オラトリオ》 |
|--------|----------|---------------|
| 12月25日 | 降誕節第1祝日 | 第I部 |
| 12月26日 | 降誕節第2祝日 | 第II部 |
| 12月27日 | 降誕節第3祝日 | 第III部 |
| 1月1日 | 新年/命名祝日 | 第IV部 |
| (1月2日) | 新年後の日曜日 | 第V部 |
| 1月6日 | 顕現祭(公現祭) | 第VI部 |

ちなみに、この《クリスマス・オラトリオ》は、1734年末から35年初にかけてのクリスマス・シーズンに成立し、初演されました。毎年、日付の変わらない固定祝日のほかに、この年は、新年と顕現祭のあいだに日曜日(1月2日)が挟まれました。

開幕は12月25、26、27日と3日連続で祝い、御子イエスの誕生の経緯を思い起こします。ここまでの《オ

<第 109 回定期演奏会>

創立 50 周年記念公演 [4]

バッハ 4 大合唱作品 [日本語] 連続演奏

教会カンタータ第 76 番 《主の栄光を 天は語り》 《クリスマス・オラトリオ》IV・V・VI 部

2013 年 12 月 7 日 (土)、13:30 開演 (13:00 開場)
杉並公会堂大ホール

光野孝子 (S)、佐々木まり子 (A)、鳥海 寮 (T)
藪西正道 (B)、東京カンタータ室内管弦楽団
草間美也子 (Org)、東京バッハ合唱団
大村恵美子 (指揮)

チケット発売中 (全席自由席)

前売り券 3500 円 / 当日券 4000 円

<チケットお申込み: 合唱団事務局>

①枚数、②お名前、③お送り先住所、④連絡先 TEL/FAX または Mail を明記。折り返し、郵便振替用紙を同封して郵送します。

◆チラシの裏面に、FAX 用の申込みフォームあり。

◆その他、電話、メール、ホームページから、などでお申込みください (申し込み先: 上掲、月報タイトル囲み内参照)。

ラトリオ》の前半で描かれました。その概要を、以下に紹介しておきます。

● **クリスマスの物語として**

第Ⅰ部 〈喜べや このよき日を〉

ローマ皇帝アウグストから人口調査の勅令がくだった。登録のため、ヨセフは身重のマリアを連れて、ユダヤの都ベツレヘムに向かっていたが、途上、マリアが初子を生んだ。宿もなかったため、赤ん坊は馬小屋の飼い葉おけのなかに寝かされた。(ルカ2:1-7)

第Ⅱ部 〈この地に野宿して 夜 群れを守り〉

その夜、羊の番をしていた羊飼いらに天使が現れ、キリスト降誕のニュースを伝えた。「きょう、あなたがたの救い主がお生まれになった。あなた方は馬槽(まぶね)に寝ている御子を見るでしょう」。夜空には天使らのハレルヤの大合唱が響きわたった。(ルカ2:8-14)

第Ⅲ部 〈あまつ君よ 聞きたまえ〉

羊飼いらは翌日、星に導かれて御子をたずねあて、礼拝した。「この御子が世の救い主になる」と語った天使のことばを羊飼いらが告げると、ヨセフもマリアも驚いた。マリアは心に深くとどめた。(ルカ2:15-20)

ここで、先述の聖書日課との関わりを見ておきます。

| 主日/祝日 | 聖書日課 | 《クリスマス・オラトリオ》 | |
|---------|------------|---------------|-----------|
| 降誕節第1祝日 | ルカ2:1-14 | 第Ⅰ部 | ルカ2:1-7 |
| 降誕節第2祝日 | ルカ2:15-20 | 第Ⅱ部 | ルカ2:8-14 |
| 降誕節第3祝日 | ヨハネ1:1-14 | 第Ⅲ部 | ルカ2:15-20 |
| 新年、命名祝日 | ルカ2:21 | 第Ⅳ部 | ルカ2:21 |
| 新年後の日曜日 | マタイ2:13-23 | 第Ⅴ部 | マタイ2:1-6 |
| 顕現祭 | マタイ2:1-12 | 第Ⅵ部 | マタイ2:7-12 |

かなり自由に入れ替えたり、省略したりしていることが分かります。個々のカンタータの約束事よりも、1曲のオラトリオとしてのまとまりを優先した結果に違いありません。《マタイ》《ヨハネ》の両受難曲にちなんでいえば、「ルカのオラトリオ」(Ⅰ-Ⅳ部)、「マタイのオラトリオ」(Ⅴ-Ⅵ部)という性格が色濃く展開されることとなりました。ルカ2:1-14は「ルカによる福音書」2章1-14節の略記です。

<後援会員・団友の皆様>

招待状をお送りしました

先月発送の10月号「月報」に同封して、お届けいたしましたので、ご確認をお願いします。未着の場合は、どうぞお申し出ください。

会場の杉並公会堂は、席数1200の広い会場です。ぜひ、知人・お仲間を、大勢お誘いあわせでお出かけください。開演時間は「13:30」午後1時半です。いつもより早めですので、お間違いになりませんよう。

● **本当は怖い《オラトリオ》の後半**

やがて喜びのうちに新年を迎えますが、ここからが後半3部の内容になり、急転直下、劇的な展開を迎えます。

第Ⅳ部 〈ささげん 讃め歌を〉

p.1の表にあるとおり、1月1日元旦の礼拝で演奏されたカンタータです。礼拝で読誦される福音書の章句は、わずかに下記の2行のみ(ルカ2:21)で、冒頭の合唱が終了すると、ただちに福音史家(エヴァンゲリスト Evangelist、テノール)の朗誦する場面がこれに相当します。

八日満ちたれば、その幼な子はイエスと名づけらる。天つみ使いの、先にマリアに告げしごとく。

(37. 福音史家、大村恵美子訳*)

*《クリスマス・オラトリオ》の上演用日本語歌詞は下記に公開：
第4部 →<http://www.ab.auone-net.jp/~bach/bwv248.4.htm>
第5部、第6部へも上記アドレスより移動できます。

ここにあるとおり、「イエスと名づけらる」が主題で、3曲目(38.)のバス叙唱〈インマヌエル おおいかにかにうるわしきみ名〉も、聖書によって予言された御子の名前をもって呼びかけられています。インマヌエルは「神とともにいます」の意味。つづくソプラノ・アリア(39.)〈わがイエス ながみ名は〉、バス朗唱(40.)〈されば ながみ名のみ〉、いずれも希望、信頼、よろこびの切々たる「み名」への呼びかけがつづきます。

この第Ⅳ部での聴きどころは、まず、もちろん冒頭合唱〈ささげん ほめ歌を〉の軽快な3拍子の舞曲リズムに乗った讃歌です。前半3部には使われなかったホルンが初めて登場し、年の改まった雰囲気響きの変化で表わしつつ、後半の物語の展開にむけて心踊るところ。中間部には早くも「あだ」(Feind=憎むべき敵、仇)という歌詞も聞かれます。

前述の、38. から40. にかけての、コラール(ソプラノ斉唱)とバスのアリオソ、あいだに挟まれたエコー(こだま)つきソプラノ・アリアの流れは、要素の多用な組み合わせを楽しんでください。ここで前後に分けて歌われるコラール(会衆讃美歌)の歌詞は、バッハの前世紀のもの、バッハ自身によって旋律付けがなされたようです。終曲のコラール合唱では、ふたた

■ **ドウッチオ**
「**嬰兒虐殺**」。叛逆の恐れをいだいたヘロデ王は、その地方で同時期に生まれたすべての嬰兒を殺させた。





■ドゥッチオ
「エジプトへの逃避」博士らの忠告により、マリアらは、ヘロデの暴虐を逃れてエジプトに身を隠した。

いずれも「マエスタ（荘嚴の聖母）」大祭壇画の部分（1308-1311）、シエナ大聖堂附属美術館。
図版提供：白木博也氏（後援会員）

び冒頭の、ホルンを加えたきらびやかな楽器編成が再現されます。ちなみにこの楽器（ホルン）は、世界で一番演奏のむずかしいものとして、ギネスブックに登録されているという話ですが、確かめたことはありません。

第V部〈栄光を主に歌わん〉

このカンタータは、「新年後の日曜日」（初演の年は1月2日）を前提に作曲されたので、前後の固定祝日にくらべ、やや軽い編成になりました（管楽器はオーボエ2本のみ）。

教会暦の聖書日課によると（前ページの表、参照）、いわゆる「エジプトへの逃避」「嬰兒虐殺」のエピソード（マタイ2：13-23）が朗読される日に当たっていますが、バッハはこの一連のめでたいオラトリオのテキストでは、これらの箇所は大胆に割愛しました。その上で、1月6日の顕現祭に読まれる箇所（マタイ2：1-12）を2分して、前半をこの部の、後半をつぎの部の台本歌詞として取りあげることとしたのです。

冒頭合唱（43.）は、ここでもスケルツォ風の軽快なリズムに乗って栄光の讃歌が歌われますが、しかしバッハの思想の深みというか、当時の信仰の常識というか、クリスマスの喜びの背景には、誕生したこの御子の将来に十字架の受難が定められていること、救い主の到来の目的が凶悪な敵との闘いであることが、一時といえども忘れられてはいません。

イエスは、ヘロデ王のとき、ユダヤのベツレヘムに生まれたまいしが、見よ、イェルサレムに東の博士ら来たりて、言えり：

（44. 福音史家、マタイ2：1）

と「マタイによるオラトリオ」が開幕します。

占星術で星の動きの異変を察知した（東の博士ら）（三聖王とも）が、ヘロデの都にやって来ました：（いづこ生まれしユダヤの君（=王）は？）

不安にかられたユダヤの王たるヘロデも、祭司長・学者らに同じ問いを發します：〈キリストはいづこに生まれんや？〉

ちなみに「キリスト」（救世主の意）は、ヘブル語では「メシア」（メサイアは英語発音）と呼ばれたもの

を、当時の世界語ギリシャ語に翻訳した呼び名であることは、ご存じのことでしょう。

この日のカンタータの主題は、怖れの闇を打ちくだく「光」です。中間（46.）と終曲（53.）の両コーラルが雄弁に告げているとおり：

暗き夜は いま / み光に吞まれぬ / 導きたまえ
さやけき / み光よ / とわに輝きて（46.）

雅びの広間にも / あらざるなれど
わが心に / 主のみ恵み射（さ）せば
まばゆき陽（ひ）となり / 輝きわたらん（53.）

第VI部〈主よ おごれるあだに〉

オラトリオ最後の部のカンタータは、顕現祭（1月6日に固定）の祝日のために作曲され、演奏されました。

顕現祭（公現祭、エピファニー）とは、この世の救い主、イエス・キリストの誕生が、ひろく世界に顕（あら）わになったことを喜び、記念する祝日です。すなわち、第V部からこの部にかけて歌われるように、東方（ユダヤの外の世界を象徴）の3博士の目に、史上初の「顕現」の出来事が起こったのです。

冒頭合唱（54.）は、古来「王侯の楽器」とされるトランペット（3本）とティムパニーが加わり、調性もこの《オラトリオ》冒頭第I部と同じニ長調に戻って、全6部の終幕を迎えます。

主よ 驕（おご）れる敵（あだ）に
雄々しく向かわしめよ / み力に頼りて
主にのみ 依りたのめば
鋭きあだの爪より / 逃（のが）るるを得ん

この世の暴虐と害悪（物語に即していえば〈鋭きあだの爪〉＝ヘロデ）との闘いへの英雄的な進軍の音楽であり、この後の展開への序曲です。

さて、3人の博士らを召したヘロデは、彼らをベツレヘムに向かわせませす。

行きて幼な子を尋ねよ、これに会わば、われに告げよ、われも行きて拝まん

（55. 福音史家、マタイ2：7, 8）

バスの担当するヘロデの台詞は、その文末〈拝まん〉の箇所最高音（d）に達し、するどく32分音符で急降下します。「拝む」動作の形象化であり、かつ恐怖と虚偽の心理の反映でもありましょう（原詞 *anbete*=崇拜・礼拝する）。

博士らはベツレヘムに向かいました。福音書には〈かの星 先立ちて み子のいます地の上にとどまりぬ〉と書かれています（58. 福音史家、マタイ2：9）。そして、ついに、母マリアとともにいる幼児に見（まみ）え、黄金・乳香・没薬を贈った、とあります。

前後の激しい音楽表現（56. ソプラノ叙唱 - 57. アリア）、（61. テノール叙唱 - 62. アリア）に挟まれて、ここでひそやかに、静謐のなかで歌われるコーラル〈ながかたえに立たん〉（59.）は、このカンタータの中心

部に置かれました。聞き覚えのある方も多かろうと思います。同じ歌詞に、バッハ自身が別の旋律を付したクリスマスの讃美歌（原曲 BWV 469「バッハ宗教歌曲集」14、右下の囲み記事参照）もまた、「まぶねのかたえに」（107番、「21」256番、）の題で日本に広く流布しました。

この部の終曲であり、かつ、われわれの《クリスマス・オラトリオ》の大団円となる音楽が、第64曲：コラール編曲の大合唱〈あだは今しも退けらる〉です。王侯の楽器（前述）の再登場による、まぎれもない凱旋歌ですが、注意深い聴き手の耳に響いてくる旋律は《マタイ受難曲》の主題コラール〈おお 主のみ頭 血に蔽われ〉（「血潮したたる」讃美歌 136、「21」310）にほかなりません。クリスマスのメッセージの奥義がここにあります。（今回は、パロディー手法のこと、およびコラールの詳細について触れ得ませんでした。前回定演のプログラムに多少触れましたのでご参照ください）

「サガノー詩篇歌」演奏会、報告

小海 基（荻窪教会牧師、団員）

列島縦断して大きな被害を与えた台風 18 号の隙間を縫うように、9月16日（月）午後4時から日本基督教団荻窪教会を会場に、「サガノー詩篇歌」演奏会が行われました。詩編歌を作曲し、ソプラノの西谷葉子さんを自らのオルガンで支えたのは、この3月に私たち東京バッハ合唱団が演奏した《マタイ受難曲》にもベースの一人として参加した医師の山本弘史さんです。

「サガノー」というのは山本さんの友人の住むアメリカの都市名（Saginaw）で、日本の「嵯峨野」とは関係ありません。山本さんは、医師をしながら日本キリスト改革派山形伝道所オルガニストとしても活躍しています。私たちの《マタイ受難曲》公演の練習にも、山形から毎週新幹線に乗って駆けつけておられました。荻窪教会で演奏会をすることになったのも、ご自身が杉並出身（高校は都立西）ということばかりでなく、山形近くにもいろいろな合唱団があるけれども“日本語上演”という自分の中で共通するテーマが、この東京バッハ合唱団にあるからなのだと、話してくれたことがきっかけでした。

スイスの宗教改革者カルヴァンが、1562年に自国語（フランス語）で「ジュネーヴ詩篇歌」を完成させて間もなくして、次々と「スコットランド詩篇歌」、「オランダ詩篇歌」……といった具合に、ヨーロッパ各国で自国語の「詩篇歌」が作られるようになりました。これらの動きは、信仰の歌というものは、訳詞をわきに添えたとしても、たとえば「ジュネーヴ詩篇歌」を、原詞そのまま歌っているだけでは留められるものではない。ヘブル語やラテン語、フランス語に留まっていられない。自分の母語で、主体的に歌い直すには

おれないという切実な動機によります。

山本さんの属する日本キリスト改革派教会は、2004年にカルヴァンの「ジュネーヴ詩篇歌」全150篇の邦訳を完成させ、礼拝に用いています。しかしそれだけに留まらないで、山本さんのように、その訳詞を用いて、もっと日本語のアクセントに忠実で、和風の響きさえする今回の「サガノー詩篇歌」の作曲のような動きが、早くも山形から始まっているのは本当に注目に値します。

今回の演奏会では、既に全150篇に作曲されている詩篇歌の中から、詩篇 1、17、21、27、44、72、73、82、94、102、135、143の12曲が、バッハの《クラヴィーア練習曲第3部》からのコラール前奏曲に挟まれて歌われました。唱歌風の素朴で懐かしい響きの詩篇歌でした。

直撃の台風にもかかわらず、大村恵美子先生を始めとして東京バッハ合唱団員の仲間たちも含め大勢の聴衆が集まりました。アンコールは、大村訳のバッハの宗教歌曲集（『J.S. バッハ宗教歌曲集』1996年刊。下欄）から「わが主エホバ われ歌わん」BWV452が歌われ、会場から大きな拍手喝采を受けていました。これもまた、信仰の歌を自らの母語と格闘しながら歌い上げていくという、東京バッハ合唱団の半世紀の奮闘の一つの実りの演奏会であると、つくづく思われました。

荻窪教会特別演奏会・予告

《クリスマス・オラトリオ》IV・V・VI 抜粋

日時＝12月23日（月/祭日）、13：30開演

会場＝荻窪教会（日本キリスト教団）

<入場無料>

金澤亜希子（オルガン）、東京バッハ合唱団

『J.S. バッハ宗教歌曲集』在庫 !!

以前より、書店からの注文にも、知り合いの方々のお問い合わせにも「品切れ・絶版」ということで、お断りをつづけていた、大村恵美子訳詞つき楽譜集『J.S. バッハ宗教歌曲集』が、事務局の棚卸の際に、10冊ずつの梱包で4束出現しました（40冊！）。

樋口隆一氏が序文にお書きくださったように、「当時のバッハを取り囲む宗教的ならびに音楽的環境を伝えるもの……、バッハを愛する全ての人の座右に置かれることを願う」ものです。

ベーレンライター社「新バッハ全集」第Ⅲ編第3巻第1部に収められた「シエメルリ賛美歌集からの宗教歌曲とアリア」を底本に、全曲全詩節の原詞に大村訳詞を併記。

丸善プラネット制作・自費出版、1996年刊行
クロス装・特上製、180ページ（330×260^{mm}底本同寸）
頒布価格 5500円（送料 450円）

団関係者に優先的にお分けします。事務局までお申込みください。

※)連載中の「バッハ・カンタータと教会暦の聖句一覧」は、スペースの都合で今号は、割愛させていただきます。